

タンザニア 切り刻まれる 子どもたち

タンザニアでアルビノ(先天性白皮症)の殺人被害が後を絶たない。ここ数年、アルビノたちは呪術市場の取引の犠牲になっているのだ。その原因は、アルビノの身体やその一部が幸運をもたらすという迷信。狙われるアルビノやその家族は絶えず身の危険に脅えながら暮らしている。

写真/マロ・コウリ 文/ヨーゴス・クセパパダコス
Photo by Maro KOURI Text by Yorgos XEPAPADAKOS



子ども(2歳)の世話をするジウアザハウ・リケリ(22歳)。殺害の恐怖から逃れるために、故郷の村からダルエスサラーム近郊に引っ越してきた。ここでも、見知らぬ人々がアルビノの彼女を探しにくるが、これまで誰も居場所を教えてはいない。写真はすべてダルエスサラーム・タンザニア。2009年3月

ハワ・シャヒディ(20歳)は、ダルエスサラーム郊外の貧困地域、マナンヤ・マラに母親と住んでいる。6か月おきにオーシャン・ロード病院に行き、がんの治療を受けている。首都近郊では迷信を信じる人の割合は低い。



オーシャン・ロードがん研究所の医師、ジェフ・ルアデ。患者のユマ(38歳)は、がんにより1年前に腕を失い、つい最近頸部のがんを摘出したばかりだ。彼が恐れるものはがんだけではない。彼の住むタボラでは、アルビノの脚や腕が幸運と雷をもたらすという迷信を信じる人たちが多く、アルビノを殺害し腕や脚を切り取り、持ち去っている

呪術の犠牲になるアルビノたち

2008年2月、タンザニア北部のビクトリア湖畔の都市ムワンザの郊外で、事件は起きた。アルビノ(先天性白皮症)(注)の8歳の少女マリアは、黒い皮膚をした2人の姉妹と家で眠っていた。祖父は別の部屋で、もう一人のアルビノの孫と寝ていた。彼は深夜に少女の悲鳴を聞いて、目をさました。孫娘たちのところに駆けつけると、侵入者たちはすでにマリアの首を切りつけて殺害し、脚を切断して持ち去った後だった。

「マリアは今、ここに眠っています」と、目に涙を浮かべて彼は自分のベッドの下を指差した。そこには墓石も墓碑銘もなかった。もしそれらがあれば、マリアの残りの遺体も盗まれていただろう。

09年2月には同じくビクトリア湖畔の村で、アルビノの14歳の少女、ユニスと妹、それに黒い皮膚をした兄弟や従兄弟と眠っていた。そこへ覆面をした5人の男たちが乱入し、ユニスを押さえつけて両腕と両脚を切断して運び去った。彼女はほどなく出血多量で死んだ。毛布の下に隠れた姉と妹は震えながら悲鳴や物音を聞いていたが、恐ろしくて犯人たちの姿を見なかった。後日、容疑者として父親が逮捕された。黒人であっても白人よりも白い肌を

持ち、金色の髪をしているアルビノは、アフリカ東南部で以前から差別や迷信の対象にされてきた。それがこの数年来、彼らをねらった悪質な犯罪がタンザニアで多発するようになった。彼らの遺体やその一部が、気味の悪い呪術市場で不法に取引されており、場合によっては5000ドル(約50万円)の値がつくのだ。06年12月以降、殺害されたアルビノは、子どもと女性を中心に56人にのぼり、身体を切断されて障がいを負った者は数百人に達する。

アルビノの国會議員、アルシヤマー・クウエイは憤る。「ムチャウイと呼ばれる呪術師が事件の背後にいます。彼らは呪術を依頼する人から、呪術の小道具として、あるいは謝礼として、アルビノの身体を要求するのです。ムチャウイはその皮膚などからお守りを作って売り、大儲けします」。こういう呪術を依頼するのは、一攫千金を夢見るビクトリア湖周辺の漁師、それに宝石掘りや金鉱掘りだという。一部の部族がとくにこの迷信を信じ、子どもでもお守りを欲しがります。ムチャウイは雨乞いや、薬草を使った治療を行うこともあり、大きな権力を持っている者もいる。こうしたムチャウイがビクトリア湖南岸に100人はいると見られる。

首都ダルエスサラームの医師ジェ

フ・ルアデはアルビノに詳しい。「アルビノは先天的に、紫外線から身体を守るメラニン色素を生成する遺伝子情報を欠いています。その発現率は2万人に1人とされていますが、サハラ以南のアフリカではその率がぐっと高くなります。タンザニアでは人口4400万人のうち、17万人以上、つまり260人に1人の割合です」。その原因は遺伝や突然変異とされるが、マリアの原虫がなんらかの作用をしているとも考えられる。アルビノは太陽光線に弱く、視覚障害を持ち、皮膚炎や皮膚がんを発症しやすい。40歳を超えて生きられるのは、今でもわずか13パーセントに過ぎない。

アルビノ協会会長のアーネスト・キマヤは、アルビノのために骨身を惜しまない。「今はともかく犠牲者の支援と迷信との闘いを最優先課題としています」。国から年間2百万シリング(約5万円)の補助金が出るが、それではとうてい足りない。個人の寄付や海外のNGOからの支援で、なんとかやりくりしている。

アルビノの子どもを持った家族の苦悩は深い。何度も引越しを繰り返して、戦々恐々と暮らしていたり、あるいは寄宿舎に子どもを避難させたりする。前述の国會議員クウエイも2人のアルビノの孤児を養女にしており、ムワンザ近くの私立学校に寄宿させている。9歳のティンディと、11歳のピビ

アナダ。彼女たちは2年前、キリマンジャロ山麓に住んでいたとき襲われて、ピビアナは右脚を切断された。

ムワンザの南西45キロのところにある国立のミチンド寄宿学校は、アルビノの子どもたちに門戸を開放している。以前は視覚障害児の学校だったが、07年からアルビノの子どもを受け入れるようになった。ちょうどアルビノへの襲撃が激しくなったころだ。現在、ここに45人の視覚障害児と、95人のアルビノの子どもがいる。有刺鉄線に囲まれた5000平方メートルの敷地には寄宿舎、教室、食堂、台所が完備している。食事朝はパンと紅茶、昼は豆とウガリ(雑穀から作った練り物)、夜は豆とご飯と、タンザニアでは「馳走だ。ここではガードマンのほうに教師やスタッフよりも多い。彼らは24時間、構内を巡回して警備する。

タンザニアのアルビノたちは太陽光線、視覚障害、がん、差別などに加えて、今、殺人の恐怖と闘っている。

(翻訳・構成)野口みどり

マロ・コウリ

フォトジャーナリスト。現在はギリシャ・アテネを拠点に、精神障がい者や麻薬中毒者、ホームレスなどを取材。「ナンヨナル・シオクラフィック」(2006)など世界中の雑誌に寄稿。2000年国際フォトジャーナリズムフェスティバルのフォトジャーナリズム賞(20年)を受賞多数。www.marokouli.com

ヨース・クセババダコス

1969年、ギリシャ・アテネ生まれ。社会問題、人道問題などを専門に取材するフリーのジャーナリスト。「GO」など多くの雑誌に寄稿。ギリシャの少数民族についてなどの著書も多く出版。

(注)かつて「白子」と差別的に呼ばれていた「白い皮膚をした人」たちは、現在ではアルビノ、あるいは先天性白皮症と呼ばれる。



ムワンザ丘郊のセントマリーズインターナショナル小中学校の外で遊ぶ子どもたち。ヴィヴィアナ(左、11歳)は、08年初めに妹のティンディ(9歳)とともにアルビノの国会議員、アル＝シャマー・クウェイに養子に迎えられた。ヴィヴィアナの脚は、侵入者によって妹の目の前で切断された

